

平成15年度第2回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

- 別表の水産関係機関が検討し、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所がとりまとめた結果 -

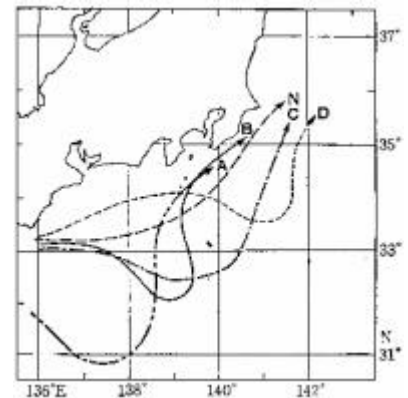
今後の見通し(2004年1月~6月)

海況

日本南岸の黒潮は、3月前半までN型、3月後半にB型、4月後半にC型になる。5月にはD型、6月にB型になる。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」~「高め」で、潮岬以東が「平年並み」~「低め」、黒潮の小蛇行が西から東へ移動するのに伴って、暖水波及時には「高め」、その後「低め」で推移する。

平年並み = 平年値 ± 0.5 程度、高め = 平年値 + 1.5 程度、低め = 平年値 - 1.5 程度



黒潮流型の分類図

川合英夫(1972):海洋物理, 東海大学出版会

漁況(来遊量予測)

マサバ太平洋系群

犬吠以北では前年並みかやや下回り、他海域では前年並みの低水準。

ゴマサバ太平洋系群

2歳魚を中心に前年並みか上回る海域が多い。

マアジ太平洋系群

豊後水道、熊野灘では前年を上回り、その他の海域では前年並みか前年を下回る。

マイワシ太平洋系群

低水準の前年並み。

カタクチイワシ太平洋系群

高水準で、前年並みか前年を下回る。

ウルメイワシ太平洋系群

土佐湾、紀伊水道外域東部、熊野灘では前年並みか前年を上回る。他の海域では前年並みか前年を下回る。

1. 本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)及び中央水産研究所のホームページ(<http://www.nrifs.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は以下のとおりです。

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当: 竹葉、狭間

〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話: 03-3502-8111(内線7376)、直通電話: 03-3501-5098、ファックス: 03-3592-0759

電子メール: toru_hazama@nm.maff.go.jp

水産総合研究センター 中央水産研究所 企画連絡室

〒236-8648 横浜市金沢区福浦2-12-4

電話: 045-788-7615、ファックス: 045-788-5001、電子メール: nrifs-kiren@ml.affrc.go.jp

水産総合研究センター 中央水産研究所 黒潮研究部長

電話: 088-832-0240、ファックス: 088-831-3103、電子メール: ishiday@fra.affrc.go.jp

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	高知県水産試験場
青森県水産総合研究センター	愛媛県中予水産試験場
岩手県水産技術センター	愛媛県水産試験場
宮城県水産研究開発センター	大分県海洋水産研究センター
福島県水産試験場	宮崎県水産試験場
茨城県水産試験場	鹿児島県水産試験場
千葉県水産研究センター	大阪府立水産試験場
東京都水産試験場 大島分場	香川県水産試験場
東京都水産試験場 八丈分場	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産総合研究所	社団法人 全国まき網漁業協会
神奈川県水産総合研究所 相模湾試験場	北部太平洋まき網漁業協同組合連合会
静岡県水産試験場	気象庁 気候・海洋気象部
静岡県水産試験場 伊豆分場	水産庁 資源管理部 管理課
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
三重県科学技術振興センター 水産研究部	独立行政法人 水産総合研究センター 開発調査部
和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	東北区水産研究所 八戸支所 中央水産研究所
徳島県立農林水産総合技術センター 水産研究所	

中央ブロック海況予報

今後の見通し(2004年1月～6月)

(1) 黒潮

潮岬以西における黒潮流軸変動

- ・薩南海域の黒潮北縁は、期間中屋久島南付近での変動が多く、離接岸を繰り返しながら、期前半は接岸、期後半は離岸傾向で推移する。
- ・12月現在九州南東沖に形成されている小蛇行が12月後半に規模を縮小する(一部が小規模な東進を起こす)が、1月前半には発達し、2月前半～3月前半に四国沖を東進する。
- ・九州南東沖では3月前半に一時的に接岸傾向となるが、3月後半に再び小蛇行が形成される。この小蛇行は4月後半～5月後半に四国沖を東進する。九州南東沖では5月後半以降接岸傾向となる。

潮岬以東の黒潮流型

- ・3月前半までN型で推移するが、小蛇行の東進に伴い3月後半にB型となり、4月後半にはC型になる。5月にD型を経てN型となり、次の小蛇行の東進に伴い6月にB型になる。
- ・房総沖の黒潮流軸は、4月前半までの期間は接岸傾向で推移するが、小蛇行の東進に伴い4月後半～5月は離岸傾向となる。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・黒潮の小蛇行や小規模な冷水渦の東進に伴って、沿岸域へ一時的に暖水が波及する。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・2月までは、黒潮が接岸傾向で犬吠埼から北東方向に流去する。親潮は、津軽暖流の張り出しと三陸沖の暖水塊の影響で、常磐海域には沖合から差し込む。鹿島灘では弱い暖水舌が断続的に形成される。茨城県北部では、沖合を中心に親潮系冷水の南下の影響を受ける。
- ・3月以降、津軽暖流と三陸沖の暖水塊の勢力が弱まり、親潮の南下が強まるのに応じて沖合から沿岸部に冷水が波及する。鹿島灘海域では暖水舌が断続的に形成される。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は「平年並み」～「高め」で、潮岬以東は「平年並み」～「低め」、黒潮の小蛇行が西から東へ移動するのに伴って、暖水波及時には「高め」、その後「低め」で推移する。

平年並み=平年値±0.5 程度、高め=平年値+1.5 程度、低め=平年値-1.5 程度

経過(2003年7月～11月) (注:経過は図1を参照のこと。)

(1) 黒潮

- ・期間を通してN型で推移した。
- ・11月下旬、九州南東沖に規模の大きな小蛇行が形成された。

(2) 薩南～房総沿岸域

薩南海域

- ・黒潮北縁は、7月は離岸、8月は接岸、9月は離岸、10月は離接岸、11月は接岸傾向で推移した。特に、7月中旬および9月中旬は中之島の南まで大きく南下して離岸した。11月上旬お

よび下旬は佐多岬付近まで接岸した。

潮岬以西

- ・ 8月中旬まで、九州東岸海域では黒潮の接岸傾向が持続した。
- ・ 8月中旬～9月中旬、豊後水道外域～紀伊水道外域では黒潮が接岸傾向であった。
- ・ 9月中旬～11月中旬、複数の冷水渦が四国沖～潮岬沖を東進した。

潮岬以東

- ・ 8月～11月、房総半島沖の黒潮は接岸傾向で安定していた。
- ・ 9月末、冷水渦が潮岬沖を通過した。
- ・ 10月上旬黒潮が伊豆半島に接近し、10月中旬遠州灘に内側反流が発生した。
- ・ 11月中旬に潮岬沖を通過した冷水渦が、11月下旬に小規模な流路変化を引き起こした。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 7月、黒潮が犬吠埼沖にを北東へ流れ、常磐海域に親潮系冷水が広く差し込んでいた。
- ・ 8月～9月、沖合域(141°E以東)の広範囲に親潮系冷水が差し込んでいた。
- ・ 10月～11月、犬吠埼および鹿島沖の黒潮域を除いて、親潮系冷水が停滞していた。

現況(2003年12月8日現在)

(1) 黒潮

- ・ 流型はN型である。

(2) 薩南～房総沿岸域

薩南海域

- ・ 黒潮北縁は屋久島の北に位置している。

潮岬以西

- ・ 黒潮は九州南東沖でかなり離岸している。
- ・ 紀伊水道外域に暖水波及が見られる。

潮岬以東

- ・ 黒潮は潮岬にほぼ接岸している。
- ・ 遠州灘沖から熊野灘へ暖水波及が見られる。
- ・ 遠州灘沖から伊豆諸島北部海域へ冷水渦が東進している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 親潮系冷水の南下が沖合に偏り、鹿島灘には弱い暖水舌が形成されている。

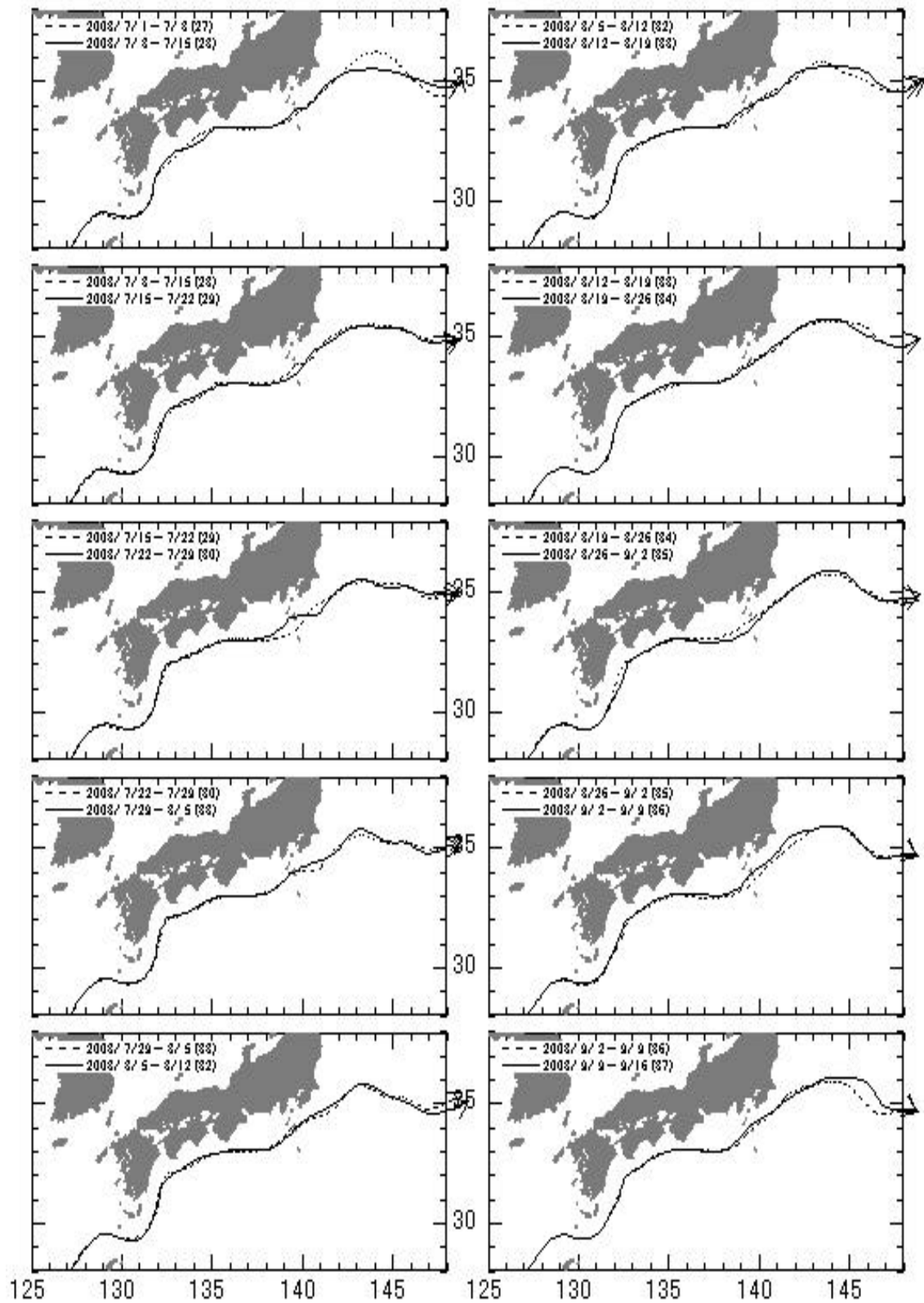


図1 a 黒潮流軸のパターン
(2003年7月～9月,海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

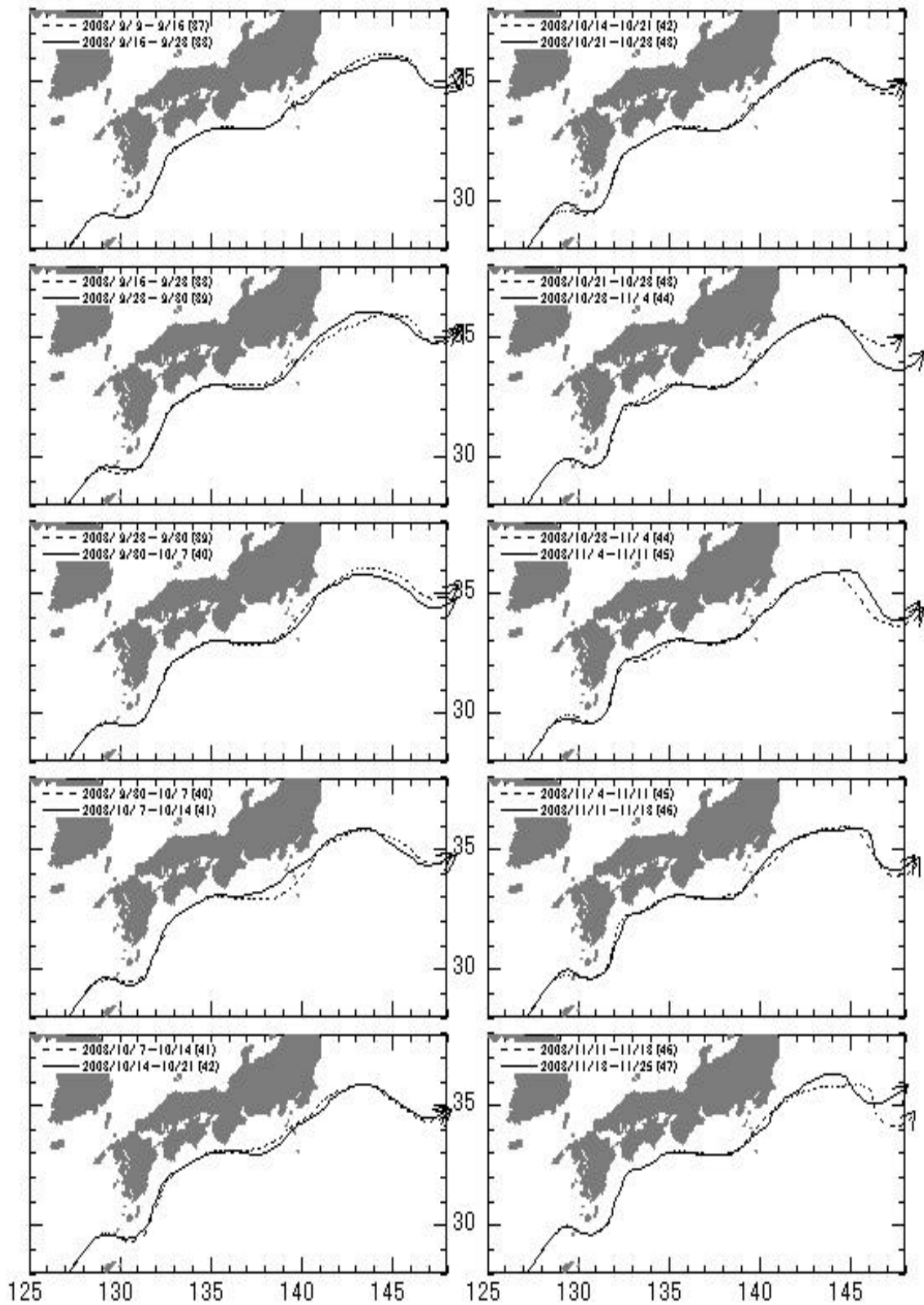


図1 b 黒潮流軸のパターン
 (2003年9月~11月,海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2004(平成16)年1月～6月）

対象海域：薩南～日向灘、豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～常磐海域
対象漁業：まき網・定置網、たもすくい、棒受け網

対象魚群：1歳魚(2003(平成15)年級群)、2歳魚(2002(平成14)年級群)、3歳魚(2001(平成13)年級群)、4歳(2000(平成12)年級群)以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～日向灘、豊後水道(まき網・定置網)

(1) 来遊量：ゴマサバ1歳魚は多かった前年を下回る。2歳以上は前年を上回る。マサバは低水準。さば類全体としては、好調だった前年をやや下回る。薩南では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて、主にゴマサバが漁獲対象となる。

(3) 魚体：ゴマサバは31～35cm(2歳魚)が主体となり、26～31cm(1歳魚)の漁獲も多い。

2. 紀伊水道外域(まき網・定置網)

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ2歳魚は前年を上回る。1歳魚も多い。さば類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて、主にゴマサバが漁獲対象となる。

(3) 魚体：ゴマサバは26～35cm(1、2歳魚)に34cm以上(3歳以上)が混じる。マサバは28～35cm(1、2歳魚)が主体となる。

3. 熊野灘(まき網・定置網)

(1) 来遊量：ゴマサバ2歳魚は前年を上回る。1歳魚も比較的好調であった前年並み。マサバは低水準。さば類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて、主にゴマサバが漁獲対象となる。4、5月にはマサバが混獲される。

(3) 魚体：ゴマサバは31～34cm(2歳魚)と26～31cm(1歳魚)が主に漁獲され、34cm以上(3歳以上)も漁獲される

4. 伊豆諸島周辺海域(たもすくい・棒受け網)

(1) 来遊量：ゴマサバ2歳魚は前年を上回る。1歳魚は前年をやや下回る。3歳以上も来遊するが多くない。マサバは低水準。さば類全体としては前年並み。

(2) 漁期・漁場：三宅島周辺や銭州が主な漁場となる。マサバの漁獲がある場合は、伊豆諸島北部海域(ひょうたん瀬～利島～大室出し)となる。

(3) 魚体：ゴマサバは26～32(1、2歳魚)が主に漁獲され、32cm以上(3歳以上)も漁獲対象となる。マサバは29～34cm(2歳魚)。

5. 犬吠～常磐海域(まき網・定置網)

(1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳以上は少ない。マサバとしては前年並みかやや下回る。ゴマサバ1歳魚は低調だった前年並み。2歳魚は前年を上回る。3歳魚以上は少ない。ゴマサバとしては少なかった前年を上回る。さば類全体としては、前年並み。

(2) 漁期・漁場：まき網では、犬吠埼から常磐海域を中心に漁場が形成される。期前半は犬吠埼沖周辺が主漁場となり、期後半は常磐沖にも漁場が形成される。ゴマサバの混獲率は前年をやや上回る。

(3) 魚体：マサバ、ゴマサバ共に、22～28cm(1歳魚)と29～34cm(2歳魚)が漁獲される。

漁況の経過（2003(平成15)年7月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ太平洋系群：産卵親魚量は1990年以降低水準であったが、1992年には9万トンの親魚から28億尾、1996年には6万トンの親魚から43億尾の卓越した加入があった。しかし、これらは未成魚段階で多獲されたため産卵親魚量の増加には結びつかず、2002年の産卵親魚量は過去30年間で最低水準(約3万トン)に落ち込んだと見られる。2000年級群の加入量は約5億尾、2001年級群の加入量は8千万尾(過去30年間で最低)と推定されるが、共に残存資源量は少ない。2002年級群は2002年漁期(7月～翌年6月)に2億7千万尾が漁獲され、推定加入量は約10億尾と近年では豊度が高い。2003年1月と5月に常磐沖合で行った表中層トロールによる調査では、2002年級群がややまとまって漁獲された。6月～10月の流し網および表中層トロール調査によっても、2002年級が2001年級よりかなり多く、2003年級も2002年級程ではないがある程度見られた。これらは2003年7月に行ったコホート解析による資源評価結果と一致する。2003年7月～10月に2002年級は約9

千万尾、2003年級は約6百万尾が漁獲された。2003年7月～10月のサバ類資源量指数は2002年よりかなり大きく、2001年並となっている。従って、2003年11月におけるマサバ残存資源量は2002年級群が主体となり、2003年級群は2002年級群より低い水準と判断する。

(2) ゴマサバ太平洋系群：コホート解析を用いた資源量計算によると、近年では推定加入量16億尾の1996年級群が卓越年級群であり、加入量12億尾であった1999年級群がそれに準ずる年級群であった。2000年級群、2001年級群及び2002年級群の加入量はそれぞれ6億尾、4億尾および9億尾と比較的安定しており、太平洋側全体としては、1999年級群よりは低い水準だが、加入量2億尾の1997年級群、3億尾の1998年級群と比べてかなり高い。また、2003年級群の加入量も黒潮域では定置網等への入網から比較的多いと推定されている。残存資源量も、2002年級群が主体となっている。

2. マサバ

(1) 来遊量

マサバ1歳魚(2003年級群)の加入量指数は、2003年5月に黒潮統流域で行った表中層トロール調査(中央水研・北水研)によると、調査が開始された1996年以降最低であった2001年をやや上回り1998年級群程度である。同調査による2002年級群の加入量指数は1999年級群や2000年級群よりかなり低かったが、コホート解析による推定加入量は約10億尾と多かった。黒潮統流域調査で2002年級群の加入量指数が低く出た原因は、マサバの産卵盛期が例年より遅く6月であったため(卵稚仔調査結果より推定)と考えられる。2003年の卵稚仔調査結果は断片的にしか得られていないが、伊豆諸島～房総海域のマサバ生殖腺調査結果からマサバの産卵は2～6月と推定されている。2003年7月における産卵親魚量(コホート解析より推定)は約3万トンと極めて低い。釧路水試による2003年6～11月の27回の流し網調査によるマサバ2003年級群のCPUEは、昨年の同様調査における2002年級群のCPUEと同レベルであった。また、6～7月の東北沿岸～西経167度における表層トロールによるサンマ資源調査(東北水研)では、サバ類稚魚の漁獲は144回の曳網で7850尾と、昨年の同様調査(71回曳網で742尾)より多かった。この漁獲物を精密測定した結果、すべてサバ属であり、マサバとゴマサバの比率は約1:1であった。しかし、調査点配置が昨年と大きく異なるため直接的な比較は困難である。9月の表中層トロール調査(東北水研)でのマサバ2003年級群の有漁点割合は25%と、昨年(2002年級群)の56%より低く、一昨年(2001年級群)の13%より高かった。10月の三陸から道東沖の表層トロール調査(東北水研、水工研)では、マサバがゴマサバより多く漁獲された(1722尾:1038尾)。これらの情報を総合すると、予測期間における関東以北への1歳魚の来遊量は前年を下回ると考えられる。

マサバ2歳魚(2002年級群)の残存資源量は、資源状態に記したとおり2001年級群より多いと考えられ、予測期間における関東以北への2歳魚の来遊量は、前年を上回ると考えられる。

マサバ3歳魚(2001年級群)の加入量は上記のように過去最低であり、残存資源量も少ないと想定される。

マサバ4歳以上も残存資源量は少なく、予測期間における来遊量は低水準と考えられる。

伊豆諸島周辺海域より西部では、サバ類に占める近年のマサバの割合は低く、漁場形成があっても不安定である。紀伊水道外域のマサバも2003年は低調であった。

(2) 漁期・漁場

関東以北では、7月上旬に犬吠埼沖で漁場が形成され、下旬には鹿島沿岸から九十九里沖に広がったが、漁況は低調で推移した。8月上旬には主漁場が金華山沖～常磐北部に北上し、8月末まで低調ながら継続的に形成された。また、鹿島沿岸から犬吠埼沖にかけても8月～9月に漁場が形成された。9月上旬には八戸沖から三陸北部でも散発的に漁場が形成されたが、主漁場は8月同様に金華山沖～常磐北部であり漁獲は低調で継続した。9月下旬には八戸～常磐北部でマサバ主体のまとまった漁場が形成され、10月上旬まで好調に推移し、常磐海域ではマサバ0歳魚(2003年級群)と思われる小型魚主体の漁獲もあった。10月中旬以降漁場は急速に南下し、やや低調に下旬まで継続した。11月は金華沖～犬吠埼沖で漁場が形成されたが、散発的であった。

北部まき網による7～11月のサバ水揚量は、35,541トで昨年(11,577ト)を大きく上回った。銚子港における水揚量も同様に14,292トと昨年(4,620ト)を上回った。ゴマサバの混獲割合は昨年や一昨年よりかなり少なかった。10月下旬～11月中旬は、八戸沖～犬吠埼沖の沿岸から沖合にかけて17～18の水温帯が広く分布し、漁場が形成されにくい状況にあったと考えられるが、11月末には親潮の張り出しが進み、水温帯が鹿島～犬吠埼の沿岸域まで狭まっている。マサバ2歳魚(2002年級群)の予測期間中の来遊量は前年を上回ると予測する。しかし、2歳魚は産卵回遊に移行するので期前半の漁獲は期待できず、期後半に北上群として漁獲されると考えられる。

伊豆諸島海域より西部では紀伊水道外域にマサバ漁場が形成されるが、他の海域ではほとんど期待できない。予測期間においては黒潮は接岸傾向と考えられるため、紀伊水道外域においてマサバ来遊に好条件となるが、主体となる1歳魚と2歳魚は既に残存資源量が少ないと考えられ来遊はあまり期待できない。

(3) 魚体

マサバの魚体は7月～8月に26～28cm、9月は28～30cmの1歳魚(2002年級群)主体に20～21cmの0歳魚(2003年級群)が混じった。10月も同様に28～30cmの1歳魚主体に21～23cmの0歳魚が混じった。11月に入り、27～31cmの1歳魚主体に22～23cmの0歳魚が混じった。2003年11月までの年齢査定結果や体長組成の推移などに基づき、関東以北における今期の年齢別の尾叉長は1歳魚22～28cm、2歳魚29～34cmと予想される。なお、関東より西部海域での成長はこれよりやや速い。

(4) 資源管理

平成14年度に行ったマサバ太平洋系群資源評価では、当面の管理目標を2005年に産卵親魚量10万トンへの回復とした。本年度の資源評価により2002年級群の加入尾数が10億尾程度、2003年7月における残存資源量は5億尾程度と推定される。近年はマサバの資源水準低下にともない早熟化が進み、2歳魚で約80%が成熟する。従って、2003年漁期にこの年級群を保護することにより、産卵親魚量の増加と上記管理目標の達成が期待される。マサバ資源回復計画は本年11月から開始されたが、当面の削減計画(出漁日数の10%)で第1回目の休漁日(11月18日午後～19日午前)に行われた。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量

ゴマサバ1歳魚(2003年級群)の漁場への加入前の稚魚を対象として日向灘を中心に実施した採集調査では調査を開始した2000年以降で採集尾数が最も多く、また過年より大きい稚魚が出現した。黒潮域沿岸では定置網への入網が多かった。一方、2003年5月に黒潮続流域で実施された表中層トロール調査では極めて低い加入量指数が得られており、釧路水試による2003年6～11月の流し網調査においても採集尾数は少ない。前期のまき網漁業では、熊野灘等を除きまとまった漁獲はみられていない。太平洋側全体でのこの年級群の加入量の評価はまだ定まっていない。

ゴマサバ2歳魚(2002年級群)は東北水研による2002年9月の流し網調査で、マサバとともにゴマサバ0歳魚が沿岸から沖合まで広い海域で採集された。犬吠以北では2002年12月にマサバに混じって比較的多く漁獲された。伊豆諸島周辺海域の棒受け網では2002年の秋季の漁獲は多くなかったが、2003年に入りこの群の漁獲割合は高くなった。2002年秋季から2003年1月まで熊野灘のまき網で継続して漁獲され、3月には豊後水道南部及び日向灘北部で多獲された。前期においても、薩南から伊豆諸島周辺海域までまとまった来遊量を示した海域が多い。これらは、近年の安定した加入量を示した年級群のなかでも2002年級群の豊度が高いという資源量推定結果を裏付けている。

ゴマサバ3歳魚(2001年級群)は5月に黒潮親潮移行域で中央水研・東北水研が実施している表中層トロール調査から、分布量が少ないと判断される年級群に当たり、太平洋側全体としては現在では比較的少ない来遊量を示している。

4歳以上の残存資源量はかなり少ない。

(2) 漁期・漁場

ゴマサバは黒潮域を中心に分布し、伊豆諸島周辺海域以西ではさば類の中で漁獲割合がかなり高い。マサバが主な漁獲対象であった紀伊水道外域でも、マサバの不振とゴマサバの安定した資源水準から近年ではゴマサバの割合が大きい。

伊豆諸島周辺海域のたもすくいと棒受け網漁業の漁場は、黒潮内または内側域の島嶼周辺に形成される。潮岬以東の黒潮の流型は期の前半はN型で推移し、3月後半にB型、4月後半にはC型となり、5月以降D型、N型、B型で推移すると予測されている。漁期当初は三宅島～銭州周辺で漁場が形成される。流型の変化に伴い漁場が移行することもある。

犬吠以北のまき網漁業では、近年の傾向から操業位置や操業日によってはゴマサバ主体の漁獲もある。

(3) 魚体

体長組成の推移、年齢査定の結果から、黒潮域での今期の年齢別尾叉長は以下の通り。1歳魚は26～31cm、2歳魚は28～35cm、3歳以上は32cm以上。犬吠以北では、黒潮域に比べて若齢魚の体長は小さい。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2004(平成16)年1月～6月）

対象海域：薩南～日向灘、豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚(2004(平成16)年級群)、1歳魚(2003(平成15)年級群)、2歳(2002(平成14)年級群)以上。

魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～日向灘、豊後水道(まき網・定置網)

- (1) 来遊量：豊後水道では前年を上回るが、その他の海域では前年並みか前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁場が形成される。期後半から0歳魚がみられる。
- (3) 魚体：15～22cm(1歳魚)が主体となる。期後半は4～12cm(0歳魚)の割合が増加する。

2. 紀伊水道外域(まき網・定置網)

- (1) 来遊量：前年並みか前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁場が形成される。期後半から0歳魚がみられる。
- (3) 魚体：15～25cm(1、2歳魚)が主体となる。

3. 熊野灘(まき網・定置網)

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁場が形成される。期後半から0歳魚がみられる。
- (3) 魚体：15～25cm(1、2歳魚)が主体となる。

4. 相模湾(定置網)

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて漁場が形成される。主体は期後半の3～6月。期後半から0歳魚がみられる。
- (3) 魚体：15～22cm(1歳魚)が主体となる。

漁況の経過（2003(平成15)年7月～12月）および見通しについての説明

- 1. 資源状態：漁獲量は太平洋中北区では1986年以降、太平洋南区では1993年以降増大し、太平洋系群全体としては1996年をピークに、1997年から3年連続して減少傾向にあった。その後、1999年を谷として2000年、2001年と連続して増加に転じた。資源量も良好な加入に支えられて1990年代に入り高水準で推移してきたが、1997年以降、加入の減少とともに3年連続して減少した。2001年には良好な加入により、資源は高水準に転じたが、2002年は加入量の減少により、漁獲量、資源量とも減少した。

2. 来遊量：2003年7～12月期における0歳魚の来遊量は、予測対象海域全体としては前年並みか前年を上回ったと推定される。しかし、来遊状況は海域によって異なり、日向灘、豊後水道東部（宿毛湾を除く）、熊野灘では前年を上回り、薩南、豊後水道西部、宿毛湾、紀伊水道外域、相模湾では前年を下回ったと考えられる。海域別にみた今期の例年の漁獲状況は、薩南～日向灘、豊後水道、相模湾では前年発生群である1歳魚が引き続き漁獲されるため、これらの海域では、前年の0歳魚（2003年級群）の来遊量の多寡が今期の漁況に結びつくものと考えられる。2002年級群の加入量は2001年級群の加入量よりも少なく、2002年級群の太平洋系群全体としての残存資源量は少ないと考えられる。例年、紀伊水道外域、熊野灘では1歳以上が漁獲主体である。紀伊水道外域では2003年7～12月期に2002、2003年級群の漁況が低調に推移したことから、今期の来遊量は前年を上回らないと推定される。一方、熊野灘では2002、2003年級群の漁況は好調に推移したため、今期も好調な来遊が引き続くものと考えられる。なお、0歳魚（2004年級群）は予測期間の後半には加入してくるが、現在のところその来遊量は予測できない。海況との関係では、沿岸域への暖水波及とマアジの来遊には関係がみられ、暖水波及の頻度が低下するとマアジの来遊水準が低下する可能性がある。
3. 漁期・漁場：予測対象海域全体としては、例年1、2月は漁獲が少なく、期半ばに1歳魚を主体とした漁となる。期の後半には海域によって0歳魚の漁獲割合が増大し、漁獲量も増加する。薩南～熊野灘においては期を通じてまき網、定置網で漁獲され、相模湾においては期を通じて定置網で漁獲される。
4. 魚体：各県資料に基づき推定した。0歳魚は4～12cm、1歳魚は15～22cm、2歳魚は22～25cm。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2004(平成16)年1月～6月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2004(平成16)年級群)、1歳魚(2003(平成15)年級群)、および2歳魚(2002(平成14)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘(まき網、定置網、船曳網)

(1)来遊量:北薩から日向灘は混獲程度。豊後水道、土佐湾、紀伊水道外域西部では低水準の前年並みか前年をやや上回る。紀伊水道外域東部から熊野灘では低水準の前年を上回る。

(2)漁期・漁場:紀伊水道外域東部では3月～4月に大羽(1、2歳魚)が来遊する可能性がある。熊野灘では3月まで1、2歳魚が来遊。他の海域は散発的。シラスは2月～3月に土佐湾、紀伊水道東部及び紀伊水道外域東部に来遊。

(3)魚体:13cm以下(0歳魚)、17～21cm(1、2歳魚)。

2. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1)来遊量:各地のシラス、伊勢・三河湾の未成魚、相模湾の成魚は極めて少ない。遠州灘から駿河湾の成魚は低水準の前年を上回る。

(2)漁期・漁場:遠州灘から駿河湾では全期間。他の海域は散発的。

(3)魚体:伊勢・三河湾では6～13cm(0歳魚)。遠州灘から相模湾では18～21cm(2歳魚)。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1)来遊量:1歳魚、2歳魚とも低水準の前年並み。

(2)漁期・漁場:1月～3月は常磐南部から房総海域でカタクチイワシに混獲。4月～5月は犬吠埼周辺～常磐南部、6月は犬吠埼周辺～金華山で、いずれも散発的。三陸南部～仙台湾の定置網は5月から。北海道にはほとんど来遊しない。

(3)魚体:1月～3月は12～15cm(1歳魚)、4月～6月は15～17cm(1歳魚)と19～21cm(2歳魚)。

漁況の経過(2003(平成15)年7月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

年初の資源量は1995(平成7)年から1999(平成11)年までは50万トンを超えて低水準ながら比較的安定していたが、2000(平成12)年から再び減少傾向が顕著となった。2003(平成15)年初は12万トンと推定される。

2001(平成13)年級群は、未成魚の漁況が低調であったが、2002(平成14)年5月～8月に房総海域で、7月～11月に仙台湾から八戸沖で計約3万4千トンが漁獲され、2003(平成15)年6月～9月に房総から三陸海域にも来遊が見られた。この年級群を近年ではやや加入の良かった2000(平成12)年級群と比べると、漁獲尾数が少ないことから豊度はかなり下回ると推定される。10月以降はほとんど来遊していないことから残存資源量は少ないと考えられる。

2002(平成14)年級群は、産卵量が前年の0.19倍と大きく減少し、各地へのマイワシシラスの来遊が少なかった。一方、親魚当たりの加入尾数と正相関の認められる常磐沖の親潮南下指数(茨城水試)が7と前年の4よりやや高めであった。しかし、黒潮親潮移行域におけ

る幼稚魚分布密度指数は0.5と前年の0.2並みに極めて小さく、未成魚の漁況も極めて低調であった。ところが、常磐～房総のカタクチイワシへの混獲重量の割合は12月～3月が約3%と前年同期の1%を上回り、2003(平成15)年1月と5月の三陸沖における表層トロール調査(中央水研横浜)および6月～11月の三陸～八戸沖合における表層刺網調査(釧路水試)でも1歳魚として前年同期の1歳魚よりもかなり多く出現し、沖合に魚群が比較的多く分布していると考えられた。漁場では、2003(平成15)年6月～9月に駿河湾、房総～常磐海域、仙台湾～三陸海域で約2万5千トン漁獲された。これらのこととこれまでの漁獲尾数の推移から、この年級群の豊度は2001(平成13)年級群と同程度と推定される。

2003(平成15)年級群は、産卵量が少なく、愛知以東の海域にマイワシシラスはほとんど来遊しなかった。一方、冬春季のマイワシシラスとして土佐湾や紀伊水道外域に比較的多く出現し、春季以降幼魚が豊後水道に出現した。親魚当たりの加入尾数と正相関の認められる常磐沖の親潮南下指数は21とかなり高めであったが、黒潮親潮移行域の幼稚魚分布密度指数は0.3と極めて小さく、三陸沖における5月の表層トロール調査(中央水研横浜)、6月下旬と9月の表層トロール調査(東北水研)、6月～11月の表層刺網調査(釧路水試)でもほとんど出現しなかった。8月～10月の道東のカタクチイワシまき網漁における混獲は前年より少なかった。なお、10月の三陸から道東沖の表層トロール調査(東北水研、水工研)でも1歳魚とともに採集された。12月上旬現在、いずれの漁場にも未成魚のまとまった来遊はない。これらのことから判断して豊度は低いと推定される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 北薩～熊野灘(まき網、定置網、船曳網)

北薩から四国沿岸では漁況が低調に推移している。紀伊水道外域東部では地方群が単発的に漁獲されており、2003(平成15)年よりは来遊条件が良くなると予測される。熊野灘では2003(平成15)年10月から2002(平成14)年級群がややまとまって漁獲されており、また、2004(平成16)年3月前半まで潮岬に黒潮が接岸して熊野灘が低温となって来遊条件は良いと予測される。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は1,398トンで前年同期の0.8倍、7～11月は1,180トンで1.9倍。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢・三河湾の成魚、未成魚の漁況は極めて低調で、また、低温のために沿岸への来遊条件が悪いと予測される。遠州灘から駿河湾では2003(平成15)年7月から10月まで2002(平成14)年級群を主対象に前年を大きく上回る漁獲が続いたが、漁況は次第に低調となっている。相模湾では2002(平成14)年級群主体に低調な漁況で推移し、2003(平成15)年級群はほとんど来遊しなかった。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は724トンで前年同期の0.7倍、7～11月は5,566トンで9.8倍。

(3) 房総～道東(まき網、定置網)

資源状態で説明した通り、当海域に来遊する1歳魚、2歳魚の資源量は少ない。2003(平成15)年は1月～3月に1歳魚がカタクチイワシに数%混獲され、4月～5月に2歳魚がわずかに来遊し、6月に1歳魚が少し来遊した。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は2,798トンで前年同期の0.4倍、7～11月は27,421トンで1.0倍。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2004(平成16)年1月～6月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2004(平成16)年級群)、1歳魚(2003(平成15)年級群)、および2歳魚(2002(平成14)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～紀伊水道外域西部(まき網、定置網)

(1)来遊量:北薩から薩南では前年並み。日向灘では前年をやや下回る。豊後水道西部では不漁の前年を上回り、東部では不漁の前年並み。土佐湾では前年並み。紀伊水道西部では前年並みの低水準。

(2)漁期・漁場:全期間、各地。

(3)魚体:11～13cm(1歳魚)主体。

2. 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1)来遊量:熊野灘と相模湾では好漁の前年並み。渥美外海のシラスは前年並み、伊勢湾と渥美外海の成魚は前年を下回る。駿河湾の成魚は前年を下回る。

(2)漁期・漁場:熊野灘は全期間で、主漁期は2～3月。伊勢湾、渥美外海及び駿河湾の成魚は5月以降。相模湾では全期間。

(3)魚体:熊野灘、伊勢湾、渥美外海、駿河湾では10～14cm(1歳魚)が主体。相模湾では9～12cm(1歳魚)と12cm以上(2歳魚)。

3. 房総～道東(まき網、定置網)

(1)来遊量:まき網は前年並みか前年を下回るが高水準。三陸の定置網は前年並み。道南から道東の定置網は前年並みか前年をやや上回る。

(2)漁期・漁場:常磐から房総海域のまき網は、1月～3月は常磐南部から房総海域、4月は房総海域から鹿島灘、5月～6月は犬吠埼から常磐南部。仙台湾から三陸南部のまき網は2月まで。三陸の定置網は1月までと4月以降。道南から道東の定置網は5月から。

(3)魚体:1月～2月前半は11～13cm(2歳魚)が主体、2月後半～3月は8～11cm(1歳魚)と11～13cm(2歳魚)。4月～6月は10～12cm(1歳魚)と12～14cm(2歳魚)。

漁況の経過(2003(平成15)年7月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

資源量推定値は1997(平成9)年から2002(平成14)年まで70万～200万トンで推移している。水準は過去20年では高位、5年間で横ばい傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域からさらに沖合まで広く分布している。

2001(平成13)年級群は各地のシラスおよび未成魚としての来遊量は多くなかったが、2002(平成14)年2月以降房総～常磐海域に多く来遊し、9月～10月に道東のまき網でも3万トンと多獲された。12月から2003(平成15)年2月まで房総から常磐海域で高水準の来遊が続いた。体長は2002(平成14)年4月に房総～常磐で9～12cm、6月に三陸～道東で11～14cm、7月以降道東から房総海域で12cm前後であった。この年級群の豊度は高水準の1999(平成11)年級群程度かそれを上回ったと考えられるが、残存量はそれほど多くないと推定される。

2002(平成14)年級群は、春シラスが不漁であったが、春生まれが未成魚として道東から仙台湾で多く出現し、豊後水道西部、紀伊水道、伊勢湾、渥美外海、相模湾、常磐海域で秋シラスが好漁であった。また、2003(平成15)年3月～7月に常磐から房総海域に高水準の来遊が継続し、8月～10月に道東でまとまって漁獲された。これらのことから、この年級群の豊度は2001(平成13)年級群並みに高いと推定される。

2003(平成15)年級群は、前年より1か月早い3月から産卵が本格化したこと、9月～10月の道東のまき網漁場で主体の1歳魚に混じって7～10.5cmで漁獲されたこと、秋シラス漁が九州から相模湾までの海域で好漁であったこと、9月～10月の三陸から道東沖の表中層トロール調査(東北水研、水工研)では1歳魚とともに採集されたことから、加入量が高水準である可能性が高い。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 北薩～紀伊水道西部(まき網、定置網)

北薩から薩南では漁況が低調に推移している。日向灘への来遊は太平洋中北部海域の資源状況と相関が見られ、関係が認められる6～7月の釧路水試による表層刺網調査での採集状況から前年をやや下回ると予測される。豊後水道西部では漁況が低調に推移しているが、未成魚が好漁。豊後水道東部では9月以降2003(平成15)年級群の漁況が低調。紀伊水道外域西部では2001(平成13)年以降の不漁が続いている。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は13,570トンで前年同期の1.2倍、7～11月は4,544トンで1.9倍。

(2) 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

熊野灘では主対象の2003(平成15)年級群が好漁で資源水準が高く、2002(平成14)年級群以上も多い。渥美外海の水温が低めで推移しているため、シラスの来遊条件は良く、成魚の来遊条件は悪いと予測される。駿河湾では2002(平成14)年級群の漁獲量が9月以降減少した。相模湾では2003(平成15)年の漁況が極めて好調であった。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は20,723トンで前年同期の1.9倍、7～11月は15,275トンで1.6倍。

(3) 房総～道東(まき網、定置網)

2003(平成15)年の沖合における成魚の資源水準は、5月の表層トロール調査(中央水研横浜)と6月の三陸～八戸沖合の表層刺網調査(釧路水試)で努力当たり採集尾数が昨年のおよそ3分の1であったことから、前年を下回ると考えられた。しかし、8月～9月の表層刺網調査(釧路水試)では前年を上回る採集があり、9月の同調査では前年をかなり下回ったが、10月～11月の同調査では反当たりで前年を上回る尾数が採集された。一方、道東のまき網の1曳網当たり漁獲量が前年を下回っている。さらに、12月上旬までの常磐海域への来遊は少ない。これらのことから、魚群量はほぼ前年並みか前年を下回ったと推定される。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は221,962トンで前年同期の1.4倍、7～11月は80,447トンで1.2倍。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2004(平成16)年1月～6月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:2002(平成14)年秋生まれ～2004(平成16)年春生まれ。魚体は被鱗体長。

1. 来遊量:北薩、薩南では前年を下回る。日向灘では前年並み。豊後水道西部では前年を下回り、東部では上回る。紀伊水道外域西部では低水準の前年並み。土佐湾、紀伊水道外域東部、熊野灘では前年並みか前年を上回る。

2. 漁期・漁場:全期間、各地。熊野灘では暖水舌の前線域に断続的に漁場が形成される。

3. 魚体:16～23cm(2003(平成15)年夏まで生まれ)が主体。4月以降は14cm以下(2003(平成15)年秋以降生まれ)も。

漁況の経過(2003(平成15)年7月～11月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

資源量の指標となる産卵量は2001(平成13)年に減少し、2002(平成14)年はほぼ横ばいであった。資源水準は過去20年の漁獲量及び産卵量の変動の中で中位、動向は最近5年の推移からやや減少傾向にあると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

北薩と薩南では主対象の2003(平成15)年級群が少ない。日向灘では2003(平成15)年5月以降の2002(平成14)年秋以降生まれ群の漁獲量がほぼ前年並みであった。豊後水道西部では来遊水準が低下し、予測期間の漁獲量と相関がある3月～11月の漁獲量が少なかった。豊後水道東部では対象の2003(平成15)年級群が7月以降好漁。宿毛湾、土佐湾では7月以降好漁となっている。紀伊水道外域西部ではここ数年低調に推移している。紀伊水道外域東部では、9月～10月に棒受網による0歳魚が不漁であったので予測期間にまき網の対象となる大羽が少ないと予測され、一方、まき網による大羽が好漁であったのでこの群が産卵して発生する小中羽が多くなると予測される。熊野灘では、2003(平成15)年級群の来遊水準が漁況から見て比較的高いと推測される。2003(平成15)年1～6月の主要港水揚量は4,164トンで前年同期の1.2倍、7～11月は5,430トンで0.9倍。